

演題：「等脚台形で咬合の位置を知る」

大野 健夫

咬合の成立を見ると、はじめヒトは歯のない状態で誕生し、
遺伝的な形態と成長発育の環境中で、外力の影響を受けながら、第8大臼歯(18才頃)の萌出を待って、
個性的な個人固有の上下顎の歯列とその歯列同士の接触による咬合が確立する。

『この咬合は1人1人違い、その違いはヒトの数だけ存在する』。

咬合には、『正常咬合』と『不正咬合』といわれるものがあり、咬合の不正を修正する時、『矯正学』では
不正位置にある歯を移動することで咬合構成を行い、『歯冠補綴』は歯の位置や形態の異常を歯冠の形態
修正を行うことで外観を整える

それに対して、『総義歯製作』は『実学』の学問である。

それ故に、『人の数だけ存在する咬合』を、歯科医師から提出された上下顎の無歯顎模型上に、再現しな
ければならない。

何故なら、舌は誕生したときから存在し、乳歯咬合期・混合歯列期・永久歯列期を通して、歯列と共に、
『食物摂取・咀嚼・嚥下・発音』といった口腔機能に対し大きな役割を果たしてきた。

この脳神経に制御された舌の運動は無歯顎になっても存在し、人工歯による位置の変化は機能を失うこ
とにつながる。

無歯顎で有歯顎時の歯列の痕跡を残しているのは唯一、『下顎の顎堤』のみであり、その事を前提に下顎
の無歯顎模型に『等脚台形』を描き、等脚台形の頂点の4点間距離を計測する。

対合関係にある上顎模型上に同じ『等脚台形』を描くことで、上顎模型上にも有歯顎時の歯の位置を設定
することが可能になる。

この手順を踏まえて上下顎の咬合床をつくると、歯科医師に求められている診療時間短縮につながるだ
けでなく、精度の高い咬合採得ができ、咬合器装着や人工歯排列が正確にできるようになる。

高価な咬合器や高価なCAD/CAMだけが次世代を担うものではない。

むしろアナログであるが故に、目の前の模型の不正な位置にある歯の正常な位置を顎堤を基準に簡単に
しかも正確に視覚的に示してくれる。

『等脚台形』の習得が、必ずや貴方の歯科技工士としての教養となる。